

# ハイカラ神戸 幻視行 21

西 秋生

## ではあと綺譚

江戸川乱歩や横溝正史を初め、神戸は探偵小説にゆかりが深い。その戦前の神戸で活躍した探偵作家が二人、相次いで発掘され、それぞれの「探偵小説選」がまとめられた。戸田翼と酒井嘉七である。いずれも地元雑誌に活動の拠点を置いたセミプロ作家だが、東京の出版物にも何作か印象的な作品を発表したことがあるため、熱心なファンはその名前を「幻の探偵作家」として記憶していたのである。



元町慕情の碑。神戸土着の作家たちは、この地にあった喫茶店で探偵小説を論じた。元町通六、元町瀧公園

ゆめをたどり まちをさまよう

戸田翼とだ・たつみ 一九〇六〜一九九二  
酒井嘉七とさかい・かしち 一九〇五〜一九四六  
ともに神戸に住み、地元で発行されていた探偵小説雑誌「ぶるぶる」を拠点に活動を続けた

に頭を入れるー」  
酒井嘉七もまたモダンリストであり、航空機やタイプライターなど最先端の設定や素材を好んで取り上げた。昭和三(一九二八)年の時点から昭和十三(一九三八)年の未来を予測した「十年後の神戸」というSFをものしっているが、一方で長唄や歌舞伎など和の世界を舞台とする作品にも佳作を残した。私が最も好むのは後者に属する昭和十一(一九三六)年の作品「両面競牡丹」である。小唄・踊りの修行を背景にドッペルゲンガー(自己像幻視)の怪をしつとり描き出してゆくが、物語は「ではあと」でもう一人の私を自撃する場面から始まる。

「私でない私、そうしたもの、で、どうして、目に見えたのでございましょう。窓の向こうには、「おりえんたる・ほてる」でございますか、巨大な、白聖の建物が、霧の海を背景に、朧げに浮んでおります」

海岸通六番にあった当時のオリエンタル・ホテルを望むのであるから、この「ではあと」は神戸大丸である。このとき、七階の写真室には中山岩太が勤めていた。

多くの珍しい商品と多くの見知らぬ人々が交錯する百貨店。そこには多くの綺譚が渦巻いていたのである。

(にし・あきお作家)

＝第1、3、5火曜日に掲載します＝

# 見慣れぬ物と人が交錯

中で最も完成度が高い。画家が描く眸の不気味さをモチーフに展開する怪異譚である。作中、△郊外電車を降りると野原であった。「中略 野原には斜めに一本道がついていて、その道の彼方に赤い屋根の洋館が見えた」という描写が懐かしい。土着の作家であるから作品の舞台には神戸とその近郊が多く取り上げられていて、それをたどるのも楽しい。

戸田翼は大正十五(一九二六)年、二十歳のとき神戸三越開店と同時に入社、以降百貨店マンとして活躍した。三越は元町商店街の

西端、神戸駅から楠公さん、湊川新開地へと向かう相生橋のたもとという、当時の神戸で最も賑わっていた場所に立地していた。併せてこのころの百貨店は珍しい物品を次々と紹介する「欲望の喚起装置」であり、大衆の憧れの的であった。そこでの勤めを終えたあと、元町通の喫茶店「オアシス茶房」や「三星堂」で開催される探偵雑誌の例会に顔を出す。帰途にはカフェーに寄ったかも知れない。かれは良き時代のモダンボーイであったのだろう。このころ、趣味として探偵小説を執筆する百貨店マ

ンとは、ハイカラの極みではない職業柄、戸田の作品には百貨店を舞台とするものが多い。付き合う女性がごとごとく半年以内に死んでしまう百貨店マンの怪を描く「吸血鬼」、何も買わないのに毎日百貨店へやってくる紳士の謎を取り上げた「相沢氏の不思議な宿望工作」。随筆「硝子越しの脚」では、百貨店の硝子ケース越しに女性の脚を覗き込むフェティシズムの楽しみに言及している。

同時代に活動した酒井嘉七は英語が堪能であり、元居留地の外国

人商館に勤めたこともある。騙りの異化効果に焦点を当てた機知が印象的な「探偵法第十三号」は、その体験に取材したものである。昭和十一(一九三六)年の作品で、拳銃強盗や殺人が起きる、元居留地の夜の淋しい雰囲気がよく表されている。「撮影所殺人事件」では、深夜の元町に映画のセットが組まれる。その台本。△午前一時、人通りが殆ど絶えた元町通りを、ダンス・ホールの帰りか、または、酒場で飲んでいたらしい、与太者風の、若者三が歩いて行く。と、一人が、軒店のおでん屋

## 戦前、活躍した作家2人